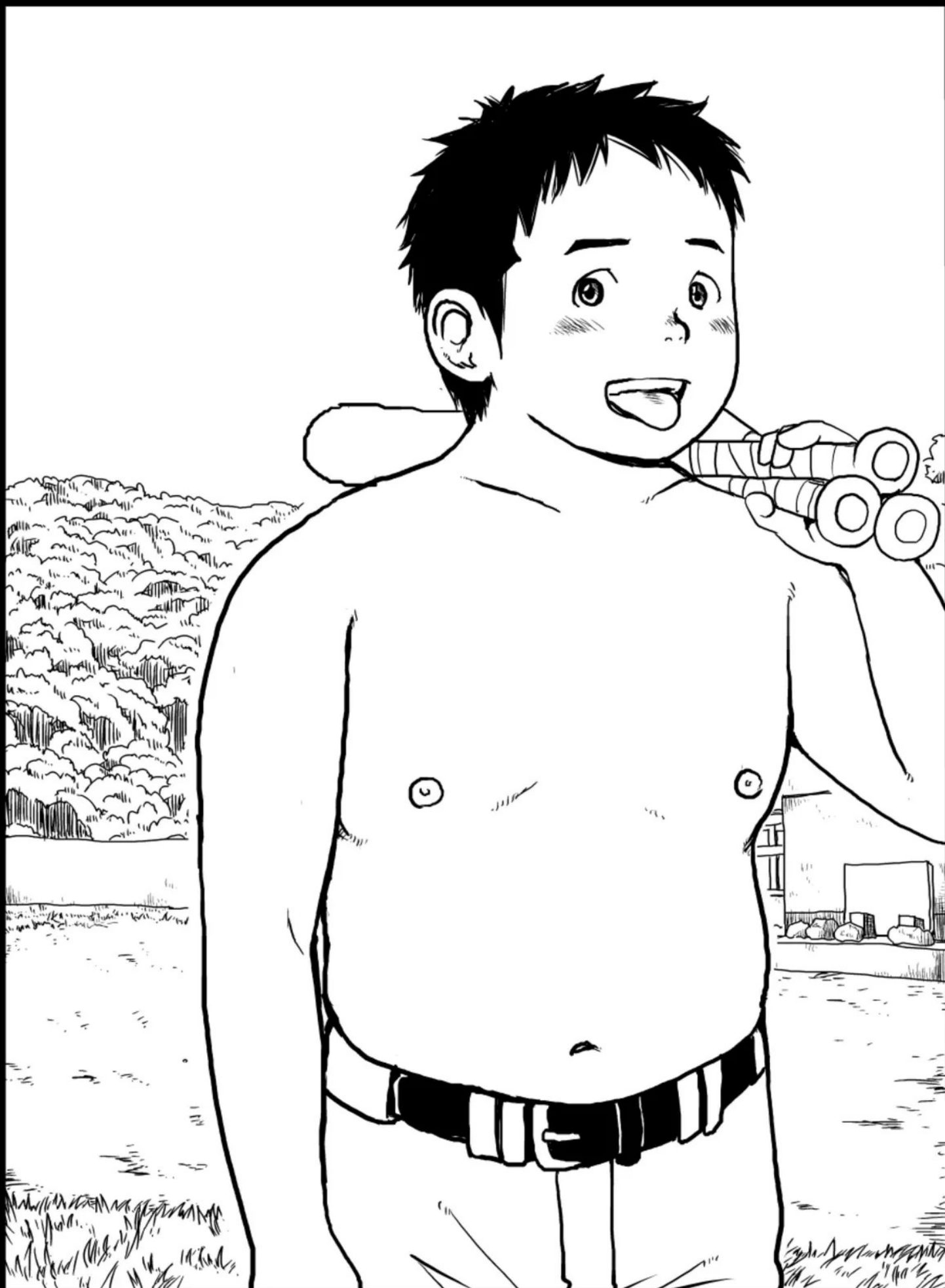


わうん、今焼少年
蜜柑色







8月11日。

今日もいい天気だ。
ボクの住む幣原市は、台風の影響を受けない限り、
夏の間はたいいてい晴れ間が続く。
気の利いたビーチとかあれば都合がいいんだろうけど、
残念ながらこの離島にそんなものはない。
あるのはほぼ手付かずの自然。
本島の小学校や中学校がわざわざ体験教室とかいって
何日かこの島でサバイバル生活を営むくらい、
ありがたがられる自然がこの島にはあるのだ。

生活必需品以外の嗜好品や高価な物が欲しい時や、
内科以外のお医者さんに見て欲しい時は、
日に二本しか出ない船で本島に行くしかない
不思議なもので、
これが日常になっているボクたちにとっては、
都会の生活のほうが羨ましいのだ。

昔ながらの大家族の家で、自然に囲まれて、
アウトドアな環境で遊びすくすくと育てば、
健全な精神が子どもに宿る。

…そんなのは現代の子どもに関連する社会問題の原因を
どうにか説明したいと思う大人たちが生み出した幻想だ。
「あの頃は～」などと昔を思い出しながら、
あたかも自分たちが健全な精神を持った
子どもだったかのように言い、問題の原因を環境の変化に
帰属させたがる。
自分たちが望んでそういう環境にできたくせに、滑稽な話だ。

断言していい。
そういった幻想を抱く人は、
そもそも子どもという生き物の本質を見誤っている。
どの環境で育ったって、健全な精神など子どもには宿らない。
子どもは弱くて、卑屈で、狡猾で、強欲で、残酷だ。
どの環境で育ってたって、きっかけさえあれば
その本質は簡単に行為となって姿を現す。
そして、一度姿を現したら、核爆発のように、
次から次へと連鎖反応を起こしながら巨大なエネルギーとなり、
自分の内部へ周囲へ飛び火する。

ボクがそうであったように、ね。



ボクは中学一年のしげのぶ13歳。ボッチャリ系だけど野球はそれなりに上手いと自負している。ボッチャリ系の中では運動がかなり出来る方だと思う...ボクのことをノブタって言って馬鹿にする奴もいるけどね。

そんなふうにはボクのことを馬鹿にするのは同級生の中ではぶみちゃん。同級生の中で唯一野球に本気で打ち込んでいて、将来プロ野球選手を目指している根っからの野球少年だ。彼の本名はひろぶみ。家は隣同士で生まれた時から一緒だ。ボクの両親とぶみちゃんの両親もこの島で育った同級生で、ボクたちは生まれたときから家族ぐるみの付き合いをしている。だからぶみちゃんとは幼なじみで、お互いのことは知り尽くしている友達だ。

ぶみちゃんはボクのことをよくバカにするけど、暇なときはもちろん、ボクが親に怒られた時とか辛い時とか、いつも一緒にいてくれた親友なんだ。

でも。

「ねえ」

ノックが終わったぶみちゃんに声をかけた。

「ぶみちゃ」

ぶみちゃんはボクに全く目を合わせることなく、ノックの順番の列の後ろに回った。ぶみちゃんとは何度かケンカしたことあるけど、それでもボクのことを無視したり避けられたりすることはこれまでなかった。でも...

ボクたちは親友だった。

でも昨日、ボクたちの関係を一変させることがあったんだ。





昨日の練習後。
ぎいち先輩にぶみちゃんとボクは居残りを命じられた。
ぎいち先輩とたけお先輩とぶみちゃんとボクの
4人だけの部室で、ぎいち先輩が明かした
この中学校の野球部の秘密の伝統。
それは、各学年の部員からひとり肉便器を選ぶこと。
肉便器に任命された部員は、それ以外の部員の
性処理の捌け口として扱われる。
ボクたちの一コ上の学年ではたけお先輩が
第66期生専用の肉便器として任命された。

肉便器とは具体的に何をするのかボクにはまだ理解しきれていない。
でもとりあえず、ぎいち先輩はたけお先輩に足をなめさせたあと、たけお先輩のお尻を犯した。

犯す、っていうのは男の人が女の人に
無理矢理セックスすること、そう思っていた。
実際には女の人が男の人を犯すこともあるそうだけど、
とにかくそれまでのボクの認識では異性同士でのことだった。

でも違った。
男が男を犯すことがあるってことを知った。
男のチンコを、男の尻の穴に入れる、
男同士のセックスがあるんだ。

ボクはそれを見て、どうかしてしまったんだ。
愚かにも調子にのって親友で男の…ぶみちゃんを。
理不尽にも第67期生専用の肉便器に任命されたぶみちゃんを。

嫌がるぶみちゃんをぎいち先輩が言うままに肉便器扱いして、お尻の穴を無理やり犯して…
しかもそれが存外に気持ちよくて
頭のネジが外れてお尻の中に射精してしまった。

親友にやっていいことじゃない。

ボクは帰り道、本気で後悔することになった。
どんなに償っても取り返せないくらいひどいことを、
ボクはやってしまったんだ。



「ご...ごめん」

自分がしたことがどれだけひどいことなのか、
やっと自分で認識できたとき、
とりあえずボクは謝るしかなかった。
ぶみちゃんは鼻水垂らすくらい泣いている。
「だっせえ。泣いてるよコイツ」
泣いているぶみちゃんに向かって、さっきボクがかけた言葉。
こんなにどす黒く残酷なことができる心が
ボクの中にあつたなんて信じたくないけど、
それを行動にして表した結果が、目の前にある。

「ボクどうかしてたこんなこと...ぶみちゃん大丈夫？」

大丈夫なわけない。
親友にこんなことされて、大丈夫なわけはない。

「ふっ ぶざ...けんなよ...ひぐっ」

ぶみちゃんのこんな鳴咽、初めて聞いた。

「おま...ひぐっ...なにしかわかって...」

どうしたらいいんだろう。
ボクの頭はぶみちゃんにどうやったら許してもらえるか、
そのことのみで膨大なカロリーを消費している。

ボクがしてしまったことは、取り返しがつくのだろうか？

「おいおい便器になに謝ってんだよ」
ぎいち先輩が、まるでボクが焦っているのことが、
滑稽であるかのようにいつてきた。
ぎいち先輩にとっては、ぶみちゃんはもう肉便器としてしか
認識できないらしい。

「で でも」
さっきのボクはどうかしてたんだ。
ぶみちゃんは友達であつて、肉便器じゃない。

どうかしてた。

どうかしてたんだ。







むしろ尊敬していた人がボクの手によって情けなく良がり、
射精したいと懇願してくることに強い高揚感を覚えていた。
頭の中のどこかのネジが外れてしまったのだろうか。
その割に冷静だな、とボクは自分自身を観察した。



「あ…ああ」
たけお先輩のチンコからは、
勢いはないけど30秒ほど精液が排出され続けた。
「すげえまだ出てる」
ボクがオナニーして出す時よりも、
射精の継続時間が長く感じる。
これがお尻の刺激による射精の特徴なんだろうか。

「しげのぶの指で満足したか? たけお」
ぎい先輩が、不敵な笑みを浮かべて聞いた。
「してるわけねえよなあ?」
ぎい先輩は、指なんかじゃ満足できないということが
当たり前かのように言っている。
「オレのションベン飲んだら
チンポぶち込んでやるぜ」

「んなっ…」
ぶみちゃんがすぐ反応した。
ボクもかなりびっくりした。
おしっこを飲むなんて、
体に悪いに決まっている。

「ふざけっ…もうやめてください!!」
「は?なんで?」
「何でってこんな…」
止めようとするぶみちゃんの気持ちはわかる。
多分たけお先輩を助けたいとかいうわけじゃない。
ぶみちゃんはボクの比じゃないほどたけお先輩を尊敬している。
そんな人が同級生のおしっこを飲むところなんて、
見たくないはずだ。

「ションベン…」
聞こえるか聞こえないかくらいの声で、たけお先輩がつぶやいた。
ぶみちゃんは泣きながらやめて、と繰り返す。

「欲しいですっ…」
たけお先輩は、笑顔で、首肯した。

ぶみちゃんが失望しようが軽蔑しようが関係ないのだ。
「オレはぎいさんの肉便器です」
だから…ションベンだって喜んで飲みます」
これが、肉便器となったたけお先輩が望む姿なんだ。



昨日の部室での出来事は当面の間、
ぎいち先輩とたけお先輩、ぶみちゃんとボクだけの秘密になった。
というのも、ぎいち先輩がぶみちゃんをどうするか
ボクに一任したからだ。
つまり、もうぎいち先輩はぶみちゃんに手を出さないし、
他の2年生もそれに関わることはない。
1年生の肉便器は1年生で、
それが伝統らしい。
逆に言えば、昨日ボクがたけお先輩に手を出したことは、
本来ならばルール違反だそう。

野球部の肉便器に関するいくつかのルール、
それを遵守するようにぎいち先輩に指導された。
この伝統を何十年も継続させてきた重要なものだ。

たくさんあって覚えきれなかったけど、
とりあえず今守らなければならないことは、
野球部以外の人間にこの伝統を口外しないこと。
学校の授業中や部活中は普段どおりの関係でいること。
暴力によって従わせるようなことをしないこと。

ボクは今のところ誰にも…
ぶみちゃんにもこれきよにも話してない。
ボクは普段どおり振舞おうとしていたが、
ぶみちゃんはそうもいかないみたいで、
これきよは不自然さに気づいたようだ。
ぎいち先輩もたけお先輩もそのへんは慣れているようで、
全く不自然さはない。
昨日あんな事があったけど何事もなかったかのように、
たけお先輩はいつも通りの練習メニューをこなしている。

あのあとたけお先輩はぎいち先輩のおしっこを
嬉しそうに飲んだあと、
2度目のセックスを始めた。
たけお先輩が仰向けに寝たぎいち先輩にまたがり、
たけお先輩が自分で腰を動かして、
ほどなくふたりとも絶頂を迎えた。
その瞬間のたけお先輩は、(実際どうなるか知らないけど)
まるで麻薬をやったかのような恍惚とした表情だった。

今、練習しているたけお先輩は
そんな痴態を演じた男には到底見えなかった。



たけお先輩はキャプテンのひでき先輩とピッチングの練習をしている。
たけお先輩は走攻守において、うちの野球部の他の部員より一段レベルが上で、既に高校レベルと言ってもいいはずだ。
なにより、特筆すべきはピッチャーとしてのその投球。
140km/h代の速度を楽に出す。
高校野球では140km/hを出す投手は珍しくもないが、
中学2年生で、しかも体が出来上がってない段階でこれは凄まじいことだ。

やはりたけお先輩は野球選手としてはホンモノだ。
才能もあるし努力もしていると思う。

こんな人が肉便器として…
あの筋肉質な男らしいお尻を自分からさし出して…

っ!!
うわわっ
やばいやばいやばい!!
ボクは自分の股間を抑えつけた。
男のお尻を見て勃起してしまった。

やっぱり昨日からボクの頭のどこかのネジが
外れてしまったとしか思えない。

これまで男の裸に興味を持ったことなんて
一度もなかったはずだ。
実際、ボクとぶみちゃんとこれきよは、
ふみまろが本土から持ってきた、
女子高生の制服を着た女の子たちが、
パンツをはかないで街中をエッチな格好で
歩きまわるというエロDVDを観て初めてオナニーをした。

昨日まで、チャンスを見つけてはオナニーしてきたけど、
そのときのおかずはいつも脳裏に焼き付いた、
女子高生のおっぱいとお尻だった。
マンコもみたんだけど、モザイクが入っていてあんまり
鮮明に覚えていなかった。
とにかくボクは女の子が性的な嗜好対象のはずだった。

それがこんなことになってしまったのは、
昨日の出来事が引き金になったのは間違いない。





...そう。

そうだ。

全部昨日のことがあったせいだ。

ボクは完全にぶみちゃんと友達ではなくなった。

いまぶみちゃんは黙々と素振り続けている。ぶみちゃんとは今日、一回も口をきいていない。多分、昨日のことがあった以前のように、ボクとぶみちゃんが自然な形で会話することは当分無理だろう。

ぶみちゃんはもう、ボクのことを気軽にノブタって馬鹿にして、ボクの部屋に来て漫画本を勝手に持って帰って、たまにボクが落ち込んでいるときに少ない小遣いで肉まんおごってくれたりすることはもうないはずだ。

これまで築いてきた友達としての信頼関係なんて、もう二度と再構築できないくらいに粉々に瓦解した。

昨日の部活後の部室での一件は、先輩に強要されてやらざるを得なかったってことで、本気で謝罪すればなんとかなったのかもしれない。

本気で土下座して謝って、何発か殴ってもらえばよかったのかもしれない。

でも、そうはならなかった。

まだ修復の可能性が...ほんの少しでも。ほんの少しでもあったボクたちの関係を決定的に変化させたのは...

...昨日の帰り道だ。



「待ってよぶみちゃん」

部室であったことを謝罪するのはこの帰り道でやるしかない。この機を逃したら、もう二度とぶみちゃんと本心で話すことなんか出来なくなる。そう思ったボクは、ボクから距離をとろうと足を速めるぶみちゃんを追いかけた。

家は隣同士だから、お互いの家に着くまでに、ボクはぶみちゃんに本気で謝って許してもらわうしかない。今日は許してくれなくても、長い時間がかかったとしても、謝り続けるしかない。そう思った。

少しでも望みがあるなら。ぶみちゃんという大切な友達を失いたくないんだ。

「ぶみちゃんってば」
ボクのことを無視して歩を進めるぶみちゃん。

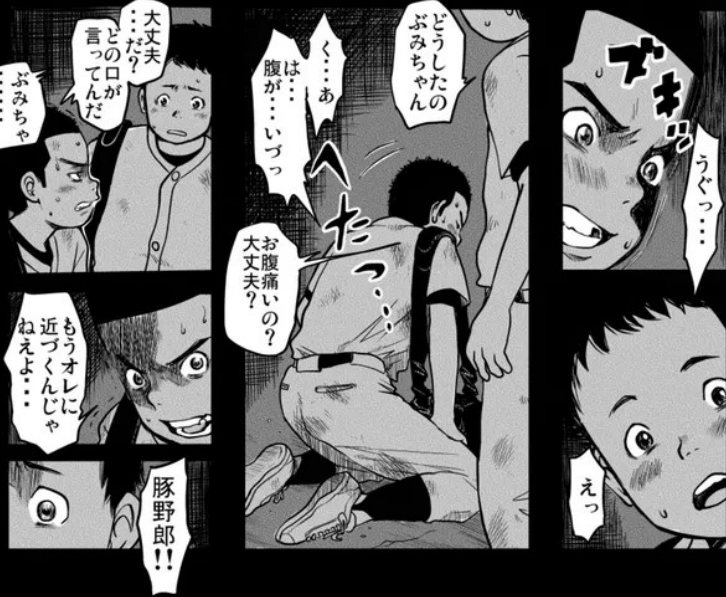
「ちゃんと...謝りたいんだ」
ぶみちゃんは一切ボクと目を合わせない。

「あのときはどうかしてたんだよ。せ...先輩にそそのかされちゃって」
どれも嘘ではない、と思う。でもあれだけのことをしといて、言い訳臭い気がした。

「で でもホントに...
ホントに悪いことしたと思ってるよ...
その...」
一瞬次の言葉を言おうかどうか迷った。
「...友達に...
あんなことするなんて...」

その言葉をきいて、ぶみちゃんは足を止めた。

「ぶみちゃ...」
しばらくの間、沈黙が続いた。



「もうオレに近づくんじゃねえよ…豚野郎!!」
もとの関係に戻る可能性は少しもない。
ぶみちゃんの鬼気迫る表情と言葉が、それを物語っていた。



「うっ……くそっ……」
 声を張り上げたのが下っ腹に響いたのだろうか。
 さらにぶみちゃんはうずくまった。

「ちょっ マジで…!？」
 ボクが無理やり犯してしまったせいだ。
 男同士でセックスするとどうなるかなんて、
 ボクは知らないからものすごく不安になってきた。
 とりあえず大人だ。
 誰か大人を呼ばなければ。

「このあたりに家とかないし…ちょっと移動…しないと。
 ボクがおぶっていくから」
 そういってぶみちゃんの肩に
 ボクが手をかけたその時だった。

「さわんなっ」
 ぶみちゃんは今まで聞いたことないような
 細い、でも耳に響く声で恫喝した。

キレられたと思って一瞬びっくりした。
 でもぶみちゃんの右肩に触れたボクの左手に、
 ぶみちゃんの震えが伝わってきて、
 キレているわけじゃないことがわかった。

ぶみちゃんは、怯えているんだ。

ボクに触られて、またさっきみたいなことを
 されるんじゃないかと怯えて震えている。
 ボソボソと何かを言っているが、ほとんど聞き取れなかった。

やっぱりそうだ。
 ボクとぶみちゃんはもう、二度ともとの関係には戻れない。

それが確信に変わったとき、目の前が真っ暗になった。
 そしてすぐに次にボクが取るべき行動を一筋の光が明示した。
 その光は、ボクの頭のネジが外れたところから漏れる光。
 その光源は、ボクの本質だ。

ボクはぶみちゃんを手放したくない。
 もとの関係に戻れないで疎遠になるくらいなら…
 別の関係を作り上げればいいんだ。



「おい...！
はっ...放せって言ってるんだろ!!」
ぶみちゃんの声が、人気の無い、
ただ木々が立ち並んでいる道に響く。
僕はぶみちゃんの腕を掴んで、
さらに人気の無い方へ、無理矢理引っ張っていった。

「腹が...もうやべえ
限界だ漏れる...」
ぶみちゃんの腹痛は、とりあえず便意によるものみたいだ。
抵抗をしながらはいるが、ほとんど力が入っていない。
「どっか...トイレに...」
本当に、ほとんど限界なんだろう。
多分ぶみちゃんの思考はしっかり機能していない。

「馬鹿？
このあたりにトイレなんか無いよ」
しばらくは民家もないし、公共の施設もない。
ちょっと考えればわかるだろう、
というような蔑む感じで言ってみた。

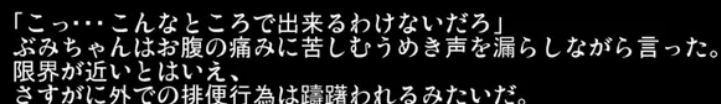
「んだと...てめえっ...」
ボクに馬鹿なんて言われたことがないから、
それが癪に障ったらしい。

「ホントのことだろ」
ボクは全く気にする素振りを見せず、
さらに力を入れてぶみちゃんを引っ張った。
もう足にもキテいるようだ。
下腹部と肛門に力を集中させているのだろう。
ふらついていて体躯全体に力が入ってないし、
今なら喧嘩しても楽に勝てるはずだ。

「うぎっ」
街灯の明かりが少しだけ入る木の下へ、
ぶみちゃんを叩きつけた。
ここなら人目につかないし、かといって真っ暗じゃない。
再び、意図的にネジを外したボクが望んだシチュエーションだ。

「だからさ、ここでしなよ。
漏れそうなんだろう？」
ぶみちゃんを隷属させたい、そんなボクの本質が暴れだした。





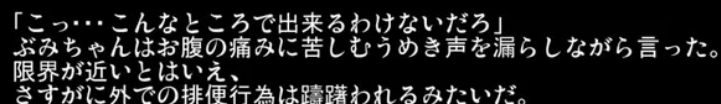
「わかった…わかったからしげのぶ…
どっか行って…ふぐうッ」
ぶみちゃんのお腹から、アニメで聞くような音がした。
少しだけぶみちゃんの態度が柔らかくなった気がした。
本人が言っているように、もう限界なんだろう。
もう一息だ。
ボクはもう、ぶみちゃんの機嫌をとる気なんて一切無い。
もう一息でぶみちゃんはボクの…。

「なんでって…はあっ…あああ」
グルグル、とさっきより強くお腹を引っ掻き回すような音がした。

ひっ…ひぐっ…
あ……

「もうかんべんしてくれよお…
オレが…なにをしたってんだよお」
肉体的にも精神的にも我慢の限界だったんだろう。
ぶみちゃんは、大声を上げて泣き出した。

「頼むからどっか…行って…
うんこしてる場所なんか…
見られたくないに決まってるだろお…!?」
こんな情けないぶみちゃんを見てボクは…。





ぶみちゃんは泣きながらよろよろと立ち上がり、観念したようにベルトを外し、ズボンを脱ぎ始めた。

「ぐぞおっ…」
鼻声のぶみちゃんは、恥ずかしそうに、悔しそうにつぶやいて、下半身を露出した。
今日部活中に、グラウンドで生ケツバットのために生尻を出して恥ずかしがっていたいたが、先輩から強要されたその時と今は状況が違う。
今の恥ずかしさと悔しさは、その時の比ではないだろう。

ぶみちゃんのお尻には、その生ケツバットの跡がこの薄暗闇の中でもはっきりわかるくらい残っていた。

「なに猿みたいなケツ出してんだよ。
恥ずかしくないの？」
意図的にぶみちゃんの羞恥心をあおる。

…もっと。
もっともっと。
もっともっともっと追い込んでやる。

「情けなさ過ぎてかわいそうだからチャンスやるよ」
ボクに哀れに思われる。
そのことだけで、ぶみちゃんのプライドはズタズタなはずだ。

「ボクにどうして欲しいのかちゃんとお願ひしてみろよ。
肉便器らしくお願いできたら考えてやるから」
ぶみちゃんがボクに対して下手に出るなんて、これまでなら考えられなかったことだ。

「もう…
うんこ我慢…できない」
でも、こうなった今、ボクとぶみちゃんの関係は変わったんだ。

「頼むから…」
そう。
ぶみちゃんはボクの肉便器だ。

「ひとりにして…くだ…さい…」
追い込んで、追い込んで、追い込んで、わからせてやるんだ。
ボクから離れることなんて、出来ないってことを。



「はい残念」
言うだけ言わせて、ボクはその願いを無視する。
「肉便器のひろぶみが情けなくうんこ漏らすところをじっくり…観察しようかな」

「えっ…
そんなおま……」
ぶみちゃんは本当にお願ひしたらボクが言うことをきくとも思ってたんだろうか。
かわいいやつだな、そんなふうに思ってしまった。

「肉便器のいうことなんか…
きくわけじゃない」
多少演出がかった声で、ボクはささやいた。
「さっさと捨てるよ。
くだらないプライドは」

「だからほら意地張って我慢してないで
さっさとうんこ漏らしちまえよ」
ボクはせかすためにぶみちゃんの腰をひっぱたいた。
「ひっ」とぶみちゃんの驚きと焦りが混ざったような
声が聞こえたその瞬間、

ぶおうっ

という少し湿った放屁の音が響いた。

「うわあ、なにいまの音。
おなら？」
ぶみちゃんの失態を認めさせるためにわざわざ確認した。

「ぐっ…聞くなよ…」
恥ずかしそうだし、悔しそうだ。
ぶみちゃんは平気で人前で屁をこくから、
普段を考えればそんなに恥ずかしくないはずだ。
でも、さすがにボクの目の前で生尻をさらけ出して
屁をこくことは、羞恥心をくすぐったようだ。

「あ…もう屁だけじゃ…」
いよいよ、という切羽詰った声で
ぶみちゃんが我慢の限界を告げた。
「うんこ…でちまうっ!!」





ボクは心の奥に
眠っていた自分の
本質的な欲求を
理解した

ほら...
ちゃんと舐めろよ
たけお先輩みたいに
美味そうにさ



ぶみちゃんは
例え嫌われたって
手放したくない
...ボクにとって
大切な存在だ

そしてそんな
ぶみちゃんを
ボクのモノとして
屈服させたい

これが

ボクはもう
自分の意志で
ぶみちゃんを犯す

ケツ
なんだが
いい??
気持ちいい??

ボク
の本質
だの

あとがき

ふうふうふうふうううやっと思ったあ！
長かったなあこれ…。
結構前に描き始めたのにすごい時間かかっちゃった。

前作はフルカラーでしたけど
カラーだと指定されるモザイクがきつすぎて
こっちの思ったとおりにならないので
トーンにしました。
でも色塗ったほうが楽でしたねえ。

でも試行錯誤してるうちにComicStudioがものすごく
多機能で優秀だってことに気づきました。
タブレットでどうしてもブレる線を補正してくれたり
効果線引きやすくしてくれたり
なんていい子なんだおまえは。

今回はちょっとスカトロめいたものを
描きましたけどホントのスカトロっぽいのは
「はじめてのともだち」で描きたいなあ。

最近性癖の表れが顕著だな。
こんな変態の描く漫画にお付き合いしていただける
貴重な方は末永くよろしくお願いしますー。

つぎは
「せんせーとご主人さま」か
「はじめてのともだち」か
「いじめパンデミック」あたりでー。

どろんこ夕焼 耕太